

ウェールズ国立美術館蔵 ターナーからモネへ

静岡市美術館 2017.11.23～2018.01.28 福井県立美術館 2018.04.07～05.27



「ウェールズ国立美術館」は、1907年に英国・ウェールズを中心都市カーディフに創設された美術館で、英国の巨匠「ターナー」「コンスタブル」「ロセッティ」「ホイッスラー」や、「ミレー」「コロドー」「マネ」「モネ」「ピサロ」「シスレー」「ルノアール」などの近代美術の収集で知られている。

今回、当館のコレクション「約70点」が、日本で約30年ぶりに公開される内容は、19～20世紀に至る英仏両国の美術の変遷をたどるもので、印象派の「モネ」や「ピサロ」は、戦争の戦禍を避けるために滞在したロンドンで、「ターナー」の作品に触れて非常に感銘を受けたといわれている。

一方、19世紀末から20世紀初頭の英国の若い画家たちは、フランスの印象派に影響を受けた作品を描き、自国の美術に新しい風を吹き込んだ。

本展は、英仏の美術が海峡を越えて行き来していた様子を名画で辿るもので、

- ・印象派の先駆的動向にある「ロマン主義」：「ターナー」「コンスタブル」
- ・「リアリズム」の代表：「クールベ」「ミレー」「ブータン」
- ・「パリのサロンとロンドンのロイヤル・アカデミー」：「ロセッティ」
- ・印象派：「モネ」「ルノアール」
- ・ポスト印象派とその後：「セザンヌ」「ヴラマンク」で構成されている。

ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー 《難破後の朝》 1840年頃



朝もやの中で慌ただしく片付けに動き出す人々がぼんやりと、そして背後には亡霊のような難破船がうっすらと影のように描かれている。光と空気の描き方は、まるで印象派を先取りしたような風情を感じる。「モネ」は、印象派の作風を確立する前に、「ターナー」の作品の風景表現に感嘆したという。

クロード・モネ 《サン・ジョルジョ・マッジョーレ 黄昏》 1908年 上図
ヴェネツィアを訪れて、本島から見た夕日に赤々と染まる教会堂に黄昏の空と海が一つになり、右側奥にも教会堂の影姿をかすかに描いた作品である。